

丸山海道全句集
(抄)

新 雪

昭和二十三年～二十七年

第一部 一月〜四月

年頭感懐

うつせみを初湯は絹のごとつゝむ
わが歩む影へ落ちくる羽子の影
舞獅子の鈴振る媚のかなしかり
雪嶺のしたしき街の獅子の笛
十歳とおとなれば子ら手つなはず福壽草

昶りし宙をつゞける風の糸
寒風を下ろせし風の落ちつかず

雪野の悲哀

雪野来て爐火の炎影にうづくまる
吹雪来て水の倒影すでになし
猪の牙にかゝりし犬の雪を舐む
雪嶺の夕映えてより雪小止む
雪止みて漆黒の川野を流る

雪霜抄

着ぶくれて除雪婦小さし男の中

里人に春とほからぬ嶺々の雪

峠路や雪の梢ごしの雪の村

雪霜に丹波の朝明月照りぬ

寒波暖雨

春を待つ雪長靴の親も子も

如月の川浪とがることやめず

すゝぎ湯をひねもす爐火に深雪宿

目覺め子に雪天國のごとき朝

汲み上げし井水のぬくみ深雪宿

主婦祈る朝の厨に寒の鮎

大櫓は爐に焚くのみの深雪宿

犬猫に閏二月の飯のからび

雪搔いてぬくもる髪膚父祖の代も

雪の夜をあゆみて心白くなる

獸 神

昭和二十八年〜三十二年

第一部

こゝには同じ対象に向つた場合の作品のあり方について考え、その分類・構成を試みた。東京・絵画展・城・ひろしまの四作がそれで、旅中作品は毎夏の長期吟旅作品を列記したもの。

東京での熔接工及びひろしまの二作は、即時に作句したものゝに、後日連作として構成したものをとじて並記した。作者の愛着は勿論にある。

東京にて

東京八景

1 数寄屋橋

靴底に踏みし一葉もロマンの顔

黄金きんの落葉舞ひ来て靴磨きの幸福

2 日劇

東京の虹の上には裸婦が跨のり

寒風が見て過ぐ裸婦凶肌を赤む

3 議事堂

高級くわい車まに写る枯芝の吾の織く道化ぬ

議事堂が斜陽うばへり冬芝冷ゆ

4 二重橋

白鳥の翼がつゝめば冬日暮れ

街の音きこゆと鴉きみが王きみをよぶ

樹に冬星懸けるほとけもたそがれ時

寒林に火はなてば燃えそるふ燭

浮浪児へ夜の蓮が脱ぐ衣一まい

若い男女に蓮は卒塔婆のごとく破れ

エスカレータを冬空降りるごとくだりぬ

隅田川に巻く冬渦は妻のおもざし

喚く電車に積まれて冬は私語をわすれ

黄金の冬日へビルがあらそひ高まりゆく

首都へ一步の雪の足あと軌条に潰え

恋の男女に騎馬像去れよ冬木の彼方

雪黒白ならば燈籠日照れば痩せ

観音の掌の凍つる日は露店さびれ

木偶として積まる電車に白意満つ

白鳥の餌箱のほとり浮浪児飢ゑ

帽章はうすきあかゞね雪雲閉づ

青 嶺

昭和三十三年～四十三年

昭和三十三年

遠き街の灯へ外套を打ちて着る

陽を射つて矢車が夜にしてしまふ

萌えんとて蛇身の柳雨降らす

騒音の街のひと間に蚤跳ぶ音

梅林のなか鼻孔なきマリア像

大蜘蛛を馳らせ塔の夜の飢ゑ

かぞへ居し盆地の春灯一挙に殖ゆ

ひと日春光入らぬ長靴の足を抜く

昭和三十四年

はたらくとき宙でもつとも輝く蜂

角折つてなほ伊勢海老の死期知らず

花菜らんまん墓碑きざむ音土より湧く

雪の夜の蛇行の川の股裂く岩

驟雨晴れ藤の実最後の滴しぼる

大野ダムにて 二句

田植期の棺載す石の無為に冷ゆ

うごくダム男の髯も木々も萌ゆ

早乙女の団結を夜が解きはなつ

照明のダムにくらげの彩鉄帽

泥つかみつゝ穴を出づる濠の蟹

日昇れば金一すぢの葛の川

佐渡金山 三句

夜の水に熱うばはれつ藻草殖ゆ

百年の汗廃坑の錆レール

赤き百合咲く村どこか酒わかす

廃坑の蟻さゝげ持つ飯一粒

鼠くはへて走るたちと夏木の傷

万緑へ赤犬駈け入り勝つものなし

昭和三十五年

天気図をつゞる糸吐き多忙の蜘蛛

蝶墜ちし草間にはかなる水^み音

露千万

昭和四十四年～四十八年

昭和四十四年

広島にて 八句

春暁の被爆の鋼つかむ鳥

母子草なほ一雫古墳

石上神社 四句

ひる

褐色の爆壁にして白息見ゆ

桜充たし被爆の天地雨過ぐる

神鏡に鶉映り鳴き仲間呼ぶ

孕み雀被爆の月日仔に伝へ

埴土の上古の道を閉ざす霧

恋雀被爆ドームの天破れ

仔を生みて悲史の馬魚棲む霧混沌

春風に殖ゆ被爆地の彩折鶴

嶽八月万の白樺揺する風

八ヶ岳 十句

青藻なびく死の川春の朝汽笛

虹くゞり来し高原の夕餉の鱒

意地のみで聳つ被爆壁花ぐもり

宝石の秋星若き夜の研修

遠き富士聳ち夜を徹す泉の音

冬浦のまだ暮れぬ陽をうばふ屋島

高原列車の露の枕木千に万に

咳けば翔つ弱きものらの誘ひ連れ

かなかなに掘れば骨片透く村里

爛徳利持ち馴れし医師暮靄垂れ

反芻の胃のみはたらき霧の牧

飯蛸を笑へば綺羅の灯の別れ

野に生くるものらを悟し霧の鐘

八百の燈尽き神のあそぶ小春

偽らず声目覚めくる朝のキャンプ

瘦せ枯れて執念のみの蓮立つ

キャンプの火起つ足裏につたふ楽

鴨池に鴨来ず林泉に泣く嬰兒

屋島にて 八句

屋島暮れおごりの紅葉余さぬ闇

堅田にて 七句

夜風衝き降り来し鴨の声ぶざまに

栗林公園

金比羅宮

芭蕉曼荼羅

昭和四十四年～五十七年

天草五橋 「京鹿子」昭和四十四年四月号（抄）

小禽の飛ぶはここまで寒き崎

五橋の灯冷たし天へ星しりぞけ

春眠のテトラポットの顔なき群

隠れ耶蘇冬咲きて散る椿汚れ

春潮に格子は過去の遊女の垣

干潟夕日走り出し子のもろき影

森の木々こころ直くなるより芽ぐむ

一望 「俳句研究」昭和四十五年四月号（抄）

寒き村うはさ拡ぐる畦木の列

切り放つ霜の貨車一駅夫添ひ

恋猫の飲むつくばひの音なき波

古城去りいまは車窓の野火明り

飛脚五箇村合掌家 「京鹿子」昭和四十六年十月号

霧ごめに落人村へ坂一筋

村富めよ秋繭のなかねむる影

実うるしに野猿注意の石の橋

過疎村の青年ひかる秋瀬音

夕立来て飼鱒の貌すぐ歪む

泡盛草合掌村の持つ小畑

羽蟻殖ゆ夜の白山に神ねむり

紫陽花に生首棚の夕あかり

かなかなに千手の一指宙をさす

刑囚に肥桶ひとつ根雪山

葛の雨去り点滴ののこる村

箕面峡谷 「俳句」昭和四十六年十二月号

夕映えの廃屋へ入る蜂翅音

岩裂きて秋水通る仮借なし

太 白

昭和四十九年～五十年

昭和四十九年

蟹宿に一等星の岬の灯

人ばしらいまも雪呼ぶ城の層

一乗谷朝倉邸址 三句

雪原に栄華の門のありしのみ

裏作の穫れぬ雪野に火を燃やす

路の臺ほろびの館の井はぬくし

駅の墓碑多き北国雪間草

藪鬼哭して雪のうへ雪を積む

荒れ河の堆みし砂丘の花辣菲

温泉ゆ流れに傷む魚寄る春渚

余呉 三句

温泉ゆ流れに傷む魚寄る春渚

煮鮎食ふ湖の果まで雪すだれ

雪の鵜に庇を深くして雄巖立つ

琴の糸繰られ無音の雪畦木

波追うて闇来る寒さ蟹を煮る

北湖に魚骨枯枝のこと遣し

めんめんと恋の鳥鳴く忿怒仏

日向ぼこくすりのはなし左耳に聞く

雪解鳴る喜怒十一面すがりやす

秋のくれ堂塔めぐる灯を持ちて

石手寺三句

仏界の天は枯木を逆立てぬ

秋風のつむじの芯の百度石

松山市・子規堂 六句

細身似て子規親灯のランプ透く

老松の生む松ちぢり子みな一と雫

伊予土居にて京鹿子の人々と

墓原を見て秋風の子規書斎

紅葉山暮れたる部屋に語々熱し

大長島に南潮会の出迎を受く

膝いまは無き机下素通りの秋風

埠頭の手頼り秋汐またぎて着く

こちら向かぬ横顔ひとつ露の庵

枯尾花湖の底より射す光

絶筆を乱し明るき冬日浮く

蹠の無き紈鴨浮かび倦み

寒雁

昭和五十一年～五十三年

昭和五十一年

山を漕ぐ太陽うすし厄詣

歳旦吟

瑞雲へ翔たんと竜の爪牙反る

とぐる巻く方位石より雪解くる

的ちかき左眉上げ弓始

ぎしぎしと目刺は頭より嚙らるゝ

鷗より白く船発つ七日粥

水ぬるむ壁画のをとこ持つ朱唇

野施行の伏しつ起ちつゝ一と焰

一升瓶より猪口に酌む梅寒し

凍鶴の鼻孔のくらす白き降る

利休憩や鼎しづむる炉のほむら

雪の舞かざせる鈴を刀に代へ

もゝいるの帆が沖去らず春の風邪

厄の宮白衣白髪に奉仕して

野風呂忌の汲みし闕伽桶重みなし

雲雀野に内侍入水の櫛を埋む 白毫の月ひとつ懸け花の京

雛月の薪よく食べし大竈 蚕碑や村かたまりて花ぐもり

水あれば水草生ひつゝ姥多し 蛇行して花雪洞のつづく天

春風やたぬきにうつる児のあくび さかづきの裏は般若の花の宴

妙満寺に道成寺の鐘あり 二句

そよぎぬる野蒜を摘めば手にそよく 鎮魂の鐘とて撞かず花の山

雌に侍る雄蕊は小さくあたたかし 香煙の蛇身纏ひや花の鐘

連翹の四瓣等間隔の黄に 小綬鶏に無縁ぼとけの闕伽は雨

連翹に萼のみどりを賤しとも 引鴨やライター忘れぬ照り降りに

天 弦

昭和五十四年～五十六年

昭和五十四年

撃たれ猪護身の牙を剥きて死す

長幼の序に鼎立ち福寿草

野山消す男星殖えぼたん鍋

初詣一の鳥居は水の上に

猪撃って猪を食はざる幾泊り

抗はぬ羊角は孤に初茜

鬼逃げし森に火炉の炎のぼりけり

取札に密に関はる仮名十四

春を呼ぶ火と水を統べ鶉の神衣

若狭お水送り五句

さりげなく七種そろへ姥の粥

雪空の四隅射浄め神矢四つ

大寒の舌のか細き矮鶏の関

水送り神衣の袖に抱く水壺^み

雀らは陽を眩しまず寒灸

畦の雪照らし神事の炬火進む

炬火果てゝ神鷄消えたる雪の闇

浄土図に二上山あり牡丹あり

若狭姫神社

姫神を老女守りて杉の花

牡丹見て曼陀羅界も入日どき

明通寺三重塔

雪重き飛簷重ねて名を成せり

夕牡丹二上の鞍部たおり日がひとつ

愛発あらかちの関

関の宿雪まんじ降る世に遅れ

常行ぎやうに弥陀現れたまひ寒牡丹

西村家に素籠本「奥の細道」を見る

雪に代を累ね聖の一書守り

花篝鉄きしませて薪を組む

摘草に子とろ子とろの雲が出て

老夫婦ふたりに満ちて花床几

はこべらやくの字上向く迂り台

春鷄の髭伸びてゐし訃のこころ

核心の黒目色変へ目ばる焼く

筍の産ぶ声満ちし籠賜ふ

大和石光寺 四句

風媒花

昭和五十七年～五十九年

昭和五十七年

落鮎を見てゐて鷺の老早し

十月の黄の島民の肥満せり

藪巻や空似の人は見返らず

種採りや絮の踊子身をめぐり

春土におろると出でて親もなし

故山古る母を背負へば茸苔み

朝日より夕日朱の濃き氷魚ひをごころ

茸山の浮世ばなしに鳥語澄み

柚子の木の全量揺すり男騎る

月の枝にねむれば小鳥軽くなり

娶り日へ鶏蓄へし枯茨

懸煙草いのち惜しくて雀翔ち

塩鮭の齒に町の夜のチャイム沁む

小雪や居付きし猿の瓦剥ぐ

みづかきの狼狽のあと池浚へ

三十三才小さく唄ふ小さき嘴 風邪の里紙より軽く鳥の飛び

山靈は白髪にして種を採る 寒雀ついはむものもなく掃かれ

人の隙鳥はのがさず池浚へ 菊菜よりつまみし虫の夢ごこち

日向猫瓦読みつつ棟越ゆる 大黒の槌より出でて轉れり

肩の猫ふわと下ろせし初景色 轉りや刻を費えに人は食ひ

年賀状の一句

犬張子雪深かりし古き京 飛簷下に冬の細滝口説めき

鐘聞けば撞く僧思ふ葉喰 雪囿解く織月のしたり貌

妓の知らぬ雪割り酒に山河暮れ 逃水や異邦と言へど黄なる膚

遊 行

昭和六〇年〜六十二年

昭和六十年

「遊行」二十句「俳句」60・12月号

今際いまはとは音のあるらし夕木槿

群むれあれば要かなめのありて秋扇

倒れたる露の木を越え有う為ゐの山

浮世とは眠さも眠し孕み猫

夜振火やもとより魚に火難かなんあり

卵管らんを業ごうともおもひちちる虫

水引草穂が二つ出て夢遊あそび

馬追のたがひ馬がほ媾まくはへり

友ありて用あり浮世日盛りに

こほろぎの閻魔がほせる一唄

山を黄にして秋蝉の植えざまや

穴まどひ天が下をる恃たのみ穴

親知らず子知らず農に秋が来て

月そだつ夜々筆ひちりき策くちに唇かさね

一番に早稲掛け篤農にはあらず 菊鉢や両腕の生む力こぶ
鱗々と鯉削ぎてより秋深み 墨染の脱げごろも見し星今宵

一刺しに蜂は死にたる旱山 老懶か牛の背に乗る師走杣

年賀状の一句

仏域に燭とかりんの実を殖やし 牛角は攻めず矯むべし初霞

唐辛子の程を忘れし緋は憎し 読み書きに薄紙剥ぎの霜の暁

年を経し空を鏡に木賊刈 一ありて二のなき冬の庭椿

鈍行の隅にひとりの旅の神 霜の庭散るは咲くより美しと

ひそみゐし花野の刺は血を好み 七五三ゆきて帰りし彩袂

花 洛

昭和六十三年〜平成二年

昭和六十三年

花洛かなかりんは落ちて石の傷

瓦全すら危き世なり草紅葉
初春志摩マリノランドほか
八で句の海盤車の黙や面壁や

警世の落首もがもな大かりん

初旅やウツボの穴居今知れり

夜寒山罌のごとしや五条坂

潮の春ウツボ十年あくびして

山科毘沙門堂

花おもふとき冬枝垂はなやかに

甲まだこの世の用や蟹の春

鉦叩きのふやけふの人の籬かき

凧つづく幸せに馴れ初鷗

てのひらは宇宙のひとつ冬はじめ

初風呂に旭ひの出てもめ白くなり

夜だぬきにあなくろがねの裸幹

初漁に恵美須を揚げし志摩の凧

ハアーと唱ひ出す初春の島めぐり

竜髯の茂りてのちの玉づくり

なまきり
伊丹柿衛文庫

思へらく0の顎の噛みつぶり

梢頭に冬日を発し遺愛柿

鶺鴒芦焼

死の淵に千鳥の名あり千鳥来る

枯れ芦の聞きたる声はおのが声

時雨星消えて暮れざる子別れ期

兎千生んで辛夷は花の木に

雪の果ならむ祇園に男ごゑ

早耳の辛夷いつぼん川下に

鬼瓦仰ぐうしろの寒き棘

朴の花をとこの道のありとせば

流れじの冬日を映す川の嵩

帰雁かなけふの一燈献ぜしは

鶏鳴きは男の子もしたり雨水村

空にゐて天敵と呼ぶ啓蟄期

花洛以後

平成三年～平成十一年

平成三年

賀状句

一つある初日大事や羊飼

京見峠

京見えて浮世歸りの雪峠

姉川古戦場 四句

大空を歩く蠅ゐて三日の客

姉川は澄むに百年血の夕陽

芹生村 三句

過疎八戸無尽蔵なる雪と杉

枯芒おなじ討つなら大将首

山付けて人に買へとや雪の家

戦禍過ぎ田畦にそろふ七つ草

杉坂小野道風神社

遅春の桜に来よと雪眼かな

小谷落城址

くぐる注連父祖の高さをかたくなに

たましひの鴉棲みつき啼けば雪

氷室村 二句

凧揚げの子居り地蔵に花絶えず

龜塚 二句

血が曳くといふ雪中の塚詣

松柏を髪とし寒き大先祖
雪をんな一人を入るる鏡裏
同じなら一番高い懸り凧
娶り齡樂に一途の五人雛
雛遊び柴のとぼそは無力なり
花霞うちか外かのすすり泣き

日なた鳩いま弾降れば霧散せむ
迷彩や砂漠の蜥蜴にはなれず
貝雛や六十余州に富士の山
おでん屋に深海の藻の逆さ椅子
人酔へば犬は白けて夜のさくら
四国吟旅

堅田

耳袋入水の人に片思ひ

壽永四年紅涙知りし祖谷椿

湾岸戦争 三句

国境といふ人の愚や冬星座

赤をもて亡び色とす祖谷遅春

祖谷村 七句

平成十一年

浅学が非才を嘆じ暮の秋

返り花して虫媒の誤算あり

鮮紅に琥珀に夜半の遠砧

千枚漬いちまいにまい眠り酒

人追へば人の追ひくる雁渡し

みづからの十一月の咀嚼音

鳥が来て種を思へる夕日柿

おらが国をんな嫌ひの山の鷺

柘榴裂け一羽を吐きし陽のうたげ

足あげて冬野は平ら犬尿る

月兎耳より高き杵重し

葛嵐三つ児を埋めし殞かな

耕牛のおのが影捨つ泥づくり

穿孔に始む暮秋の船づくり

角逐を載せ巖頭のせり上る

生か死か金閣に雪積む鳳は 尻馬にをんなを乗せて露の山
南枝の梅囀のやうに鳥一羽 溝そばや子ひとりといふ親勝手
黄葉紅葉鹿の通ひ路吹きとぢよ 蒲の絮一番翔ちに誇りあり
初鴨の夢に外れたる白羽の矢 恋千鳥雲よ波よと歌ひたる
木の実独楽遠心に親置けば散り 野遊びの白馬に遭へり明日晴れむ
落し水低きに就くは沈む日も 初富士に鳥の空音を聞きとがめ
青山に宝さがしの木洩れ日よ 伏魔殿奥の冬至湯勧めらる
不知火へ誰からはじむ助走かな 柚子の湯に尻こそばゆくあぐらして

霜柱ほとんどの屍は美少年
腹蔵にをんな焦がして十二月
緋のこゑは火よりも高し零下なる

注・まとめた製作年は「京鹿子」に
発表された年とした。

丸山海道全句集

発行日 平成十一年十一月一日

編集人 丸山海道全句集刊行会

発行人 松尾正光

発行所 株式会社東京四季出版

定価 四、八〇〇円（税込）